



吉村道明
編輯

近世太平記四篇

中

5行
3994
11



伊5
3994
11

近世太平記四篇卷之中

一 目録

- 一 肥後口の官軍網の瀬川の満水と渡りて敵陣と破る事
- 二 豊後口攻撃并洪水の時官兵術と盡て糧食と餉事
- 二 熊本縣權令人民と撫恤一并大谷大教正大惠成施
- 一 日向口の官軍頻に賊兵と破る事
- 一 官軍進て延岡と陷る事
- 一 賊徒訣別の酒宴と催を事
- 一 賊魁西郷官軍と破て可愛嶽の絶頂と奪を事

近世太平記四篇 卷之中 目録



一 賊兵等三田井より出て官軍の糧食を奪ふ事

一 賊兵大隅の飯野を経て鹿兒島へ走る事

一 賊徒加治木の園を切抜夜に乗って鹿兒島縣廳へ

薄る事

一 鹿兒島縣下再度騷擾の事

一 米倉の官兵奮戦して諸手の官兵と連絡を通る事

一 鹿兒島縣令官物と汽船に移し賊の銳鋒と避る事

一 静寛院薨去并御葬送の事

一 振武隊の賊首貴島清討死の事

一 官兵谷山と鎮静し并縣廳を加治木に移る事

一 官軍圍繞し賊軍を困むる事

一 虎列刺病流行の事

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

近世太平記四篇卷之中

肥後口の官軍網の瀬川の満水と渡り敵陣と破る事

前巻も説く如く野津少將の第一旅團の舟の尾本營

と居る豊後口の官軍と謀り合ひ延岡の賊と襲んと頗り

方略と運ぶせり賊將等も色々思慮を運ぶ此有様は

て日敷を送りたる四方八方よりなり一人も残りて

滅亡せし先一旅團の線内にも獅子川峠及西の内を打破

三田井の方面に突出る危急の場合に逃る外はと名

策にあらんと愈集議一決せり精兵をそぐはる此方面

向^むけ、七月二十日、疾^{しつ}風^{かぜ}の如^{ごと}き勢^{いきほひ}まき、獅子川^{ししづか}西^{にし}の内^{うち}を押^お寄^よ
 たり、官兵^{くわんべい}いづくあふべいと夢^{ゆめ}も知らず、其^{その}之^{これ}些^{せう}少^{せう}の兵卒^{へいそつ}ま、
 不^ふ意^いと撃^うけ、事^{こと}なれば、はなはち勇猛^{ゆうまう}の聞^{きこ}あり、近衛兵^{きんゑい}も其^{その}
 勢^{いきほひ}の敵^{てま}、のたまきとぞとぞ、齒^せづみをなす、引揚^{ひきあ}り、此手^{このて}の
 官軍^{くわんぐん}へ大^{おほ}き苦心^{くこん}、若^{ごと}し此所^{このところ}を破^{やぶ}らるる時^{とき}、持^も一旅團^{いつりょだん}の耻^ち
 辱^{とら}の、なうらひ、豊後^{ぶんご}の官軍^{くわんぐん}の進退^{しんたい}も、大^{おほ}き不便^{ふべん}と生^なむべ
 し、いざ進^まりよ、大將^{たいしやう}の下知^{げち}、兼^かて遺憾^{いがん}、堪^たざり、兵卒^{へいそつ}を
 れ、我^{われ}劣^{せう}と踏^ふ込^こ、晝夜^{しゅや}を分^わたば、攻^{こう}撃^{げき}せ、八月二日午
 前^{まへ}第七時^{だいななとき}に至^{いた}り、悉^{ことごと}く賊兵^{ぞくべい}と逐^お拂^はひ、全^{ぜん}舊^{きう}戦^{せん}を復^{かへ}り、剩^{しの}此
 戦^{たたかひ}、賊^{ぞく}の隊長^{たいぢやう}某^{なにか}と打倒^{うちたお}し、其外^{そのほか}生捕^{なまどり}分捕^{ぶんどり}も意外^{いがい}、多^{おほ}くあり

りれば、兵士^{へいし}ハ皆^{みな}勇進^{ゆうしん}で見^みえ、り、然^{しか}るに賊等^{ぞくら}も心願^{しんげん}の達^{たつ}せ
 る、伐^き怒^どり、せめ、官軍^{くわんぐん}の一壘^{いちり}を切^き入り、日本刀^{にっぽん}を以^{もつ}て、官兵^{くわんべい}
 と切^き伏^ふせ、此恨^{このうらみ}と晴^はる者^{もの}、數十人^{そくじゅうにん}と連合^{れんが}し、此夜^{このよ}の暗黒^{あんくわく}なる
 と時^{とき}と、同團^{どうだん}の右翼^{うよく}なる星山^{せうざん}の哨兵線^{せうべいせん}へ研入^{けんいり}たり、を大
 事^{こと}、此手^{このて}の官兵^{くわんべい}ハ雷^{らい}の落^おち、下^{した}にあふ、如^{ごと}く見えたり、が
 案外^{あんがい}も官兵^{くわんべい}ハ大膽^{たいたん}不敵^{ふてき}、皆^{みな}泰然^{たいぜん}、賊^{ぞく}ハ應^{おう}じ驚^{おど}ろ
 氣^け色^{しき}ハ更^{さら}に、却^{かへ}て烈^{れつ}く賊軍^{ぞくぐん}と狙撃^{そくげき}せ、賊^{ぞく}ハ望^{のぞ}みと失^うせ、
 散々^{さんざん}に敗走^{ばいそう}せり、かゝる暫^{しばらく}無事^{むじ}なり、八月八日、満天^{まんてん}をな
 がら墨^{すみ}を流^{なが}し、如^{ごと}く目前^{まへ}の山^{やま}へ、麓^{ふもと}を黒雲^{くろぐも}立覆^{たちか}り、
 今^{いま}も、何^{なに}れ大雨^{おほい}の來^{きた}るとを、勢^{いきほひ}なり、か案^{あん}の如^{ごと}く山風^{やまかぜ}をな

吹下て大雨盆を覆が如く降來り諺よ天の底が
抜たるとむろも疑をれ更其晴間もかく同十日も降
續きたり四方の川々水崇七八尺も満盈し橋々多く落て人
民の水害と防んとほ者路頭も狼狽せり山の麓なる土地さ
へも斯の如きありまわれ賊が陣取せる下流の方四方の水
聚合して徧く田野と壓し其狼狽言計りかまを必然なり
是兵書よゆる天時よくか好機會ハ再なれんやん
此手の官兵は得たりと悦び十日の夜潛り網の瀬川の満水と
渡り河岸の賊と襲んとをせり逆す水はとらう瀧の落
如く大石とへも止あぬ勢なれば官兵も一旦も大に苦心せり

忽前軍の壯士等漲る深瀬へ跳入り抜手とぎつ泳り残
れり面々も之は氣を得て我劣と跳入り難なく此河を打渡
れり昔佐々木四郎高綱が宇治川と先陣せりも今ぞ思當り
けれ官兵は直様大炮を要所を忘る一村落を放火し敵
の陣營は迫り一時よつと喊をけり大山の崩をり押寄
たりさとも亦此河岸に陣取たる賊は數所の戦も身體大に疲
勞し持連々の敗衄も味方も殘寡はおろそ入易し新
手迎もなき事なれば辛苦の程言ふをりなく降續る雨
よ河水の漲るを見大に安堵の思となり此ありさ中少々のを
その官兵もよも襲來さるとりし浦に暫連日の勞苦と

解んとおろつて休ませし未だ浮沈の夢も覺やらぬ拂
曉は遠く耳のほろりほろり物音せし何事やらむと
首をあなればこそりもつる官兵は皆銃鎗と揮く跳入れり
そろ一大事と賊兵を銃器と採るの暇もなす皆その體まで
已が一身さへも漸く逃走のついでをぬたり官兵は逃と追と鬼
燈平の山頂を奪ひ夫より右よ方向を轉ぐ山脈を傳ひお洩
せ賊徒と逐つか賊は再び榎木峠より拒ぎ戦へり官兵
は二手に分て攻立られ賊兵も亦死力と盡くと防戦し容
易く奪ひ取べくやうもあらざり我兵卒の何時の間より
廻りくる忽然とて賊の左翼に現れ銃鎗を振て飛入る

賊も今の辟易し麓の方へと逃走れり我兵は透る山の上より
尾撃し土壘數百を乗取り遂に賊兵が小荷駄雜品と貯
し椎畑村迄お入り夫より猶も賊兵を追窮んと二手に分て
追行し敗賊の亦も杉の木峠に嘯集しとて嚴重に守備
を張り官兵は又も銃鎗の手並を見せんと跡とも見ぞと突
進せしが十一日午後第七時より遂に此賊と追のけは此日の
戦も延岡の士族及農兵五名を生捕り賊が獅子口へ輸搬を
し、糧米麵包等を分捕り又肥後の米良谷に進む別働隊
第二旅團の内二大隊に分て軍艦に乗せ日向の沖と廻り豊後
口の官軍と力と合んとし已小其地と出發せり

豊後口攻撃 洪水の時官兵術を盡し糧食を餉す事

爰に豊後の重岡より向ひたる黒澤口の官軍は八月二日小各
部署を定め一擧して賊兵を打破んとし右翼の兵に諏訪少
佐之と引率し天狗山の正面なる賊を襲ひ目的を達せし上
へ上塚より向て守備を張んとし中央の兵は野田大尉之を引
率し於藤山より同山脈あり賊壘を攻め左翼の兵の進む手
從ひ梅木の本道より歌系より向て侵入せんとし左翼は萩原
大警部之が指揮官となりて丸市尾内の正面あり松尾山下
山赤木山の賊壘を攻め夫より古江より向て守備を張り赤
木山の兵は焼井峠を侵し本道の兵は合んとし其の決議を

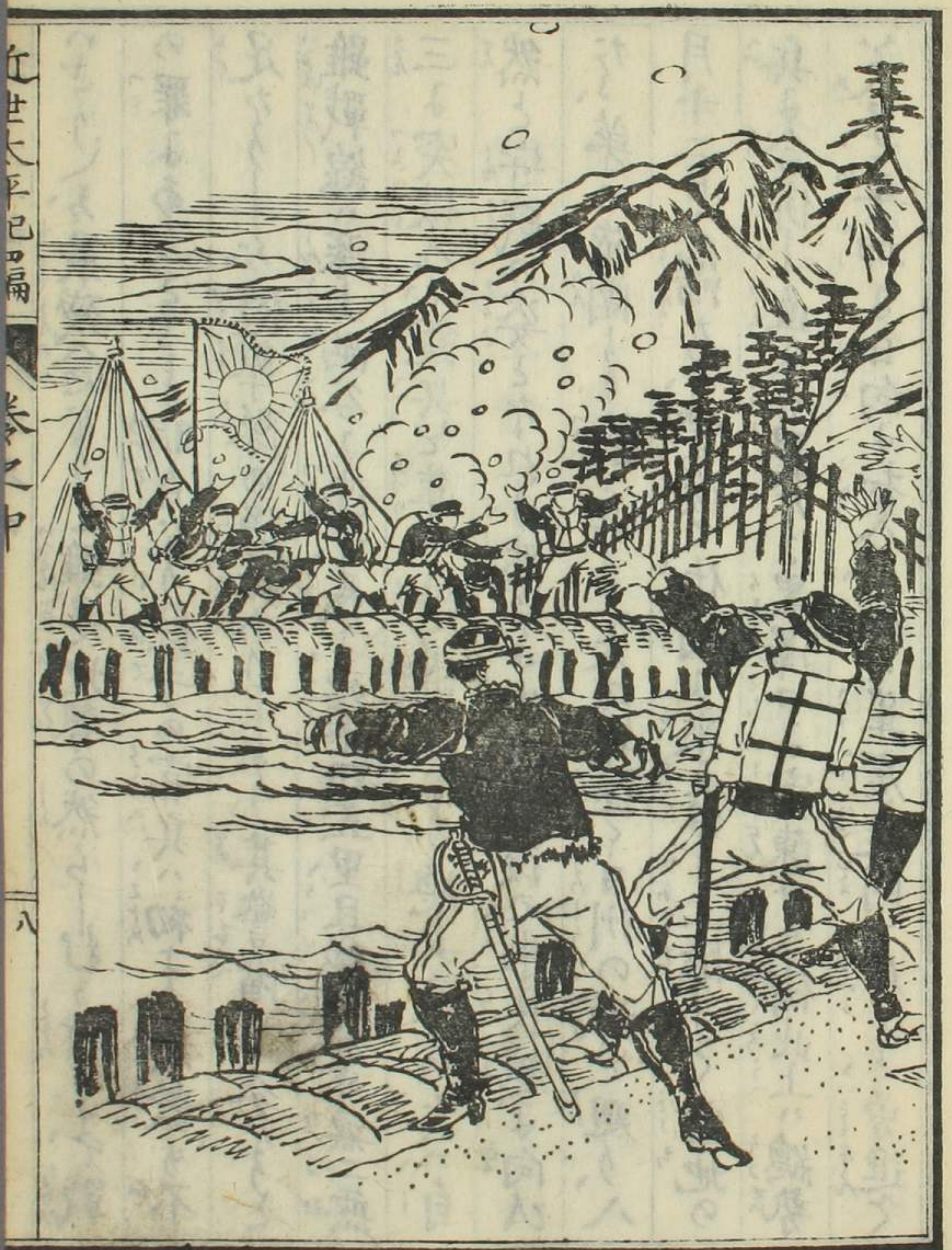
午後第五時より各所一時に戦を始め諏訪少佐の隊は十分の
勝利あり全く目的を達し野田大尉の隊も大略目的を達
し同く賊壘を陥れ尾撃し萩の峯於藤山を占領し正午戦
と收む又萩原大警部の率ぬたる一隊はヲタカチ陣の峯を
容易く奪取せしが最後の一壘は遂に今日拔き取りぬれ遺
憾なきも引揚り同日あり松尾山より向て守備を張り
透間もあつた出んとし賊の動静を伺ひなきが何如せしや
此日夜半頃より至る賊兵は遠く皆引揚げ今一人の影なき
見えし萩原大警部は直に士卒を引率し松尾赤木山
の賊壘を奪ひ上塚と歌系の交通を断切り又此頃薩州

口より進たる官兵は日向の高鍋と美々津の間ありて、連日奮戦し敵の後背を突く事なれば賊等窮鼠の勢を振る。豊後路の方へ突出せんり計難し。豊後の官兵は皆戦線の外へ二重三重の竹柵を結び警備最嚴重なり。又此日のことか中津の賊魁増田宗太郎は山谷を投じて死亡せり。此人の賊軍は従て屢豊後口の官兵と闘せしが自らの計を計り自殺せし者。又の誤失より深谷は隊者か未だ其虚實を詳しせば又同日は黒澤口の右翼萩の峯の絶頂なる我胸壁よりこの賊兵押来り。無二無三は攻登り、官兵も手術を盡く應戦せしが彼賊は必死

と窮し勢もおどろき突く事とせむ。木人形の如く更は屈する色なれば官兵も大よもど餘し如何せん。と苦慮せしが忽ち一計を案出し彼が銳氣を達せしを急らして後撃す如く是は於て官兵は東西に分れ此胸壁を譲渡せし賊兵は千辛萬苦と漸く目的を達し先是より頃日の遺恨をなす。少く安堵の思をなせしが俄然と壘壁の左右より銃鎗を揮り跳入り賊兵は大に驚き以前の銳氣も似もやらぬ死骸彈藥を棄て齒ぐと引退けり。時よ午前第六時三十分なり我兵は再び萩の峯を奪ふより益警備を嚴重し。後日の襲来を備なり。此時の傷者ハ二

十七人なりしと云ふ八月八日より前も記せしが如く大雨車軸
と流し晴間と云ふ更なる同十日や降續きたれば川々皆
満水きて橋と落せし五箇所及び水勢益漲る谷々溢れ
田野と浸し山と崩る勢も四方の通路一時止り本營重
岡より戦線へ通ざる糧道も絶り本營の將校ハ戰士の飢
餓及んこと恐れ種々苦心と運せし雖固より舟の用意も無
かれ一時途方なれりしが猶雨と侵し諸方は奔走し工
夫と指揮し人夫と募り大木と伐り橋となり大石と轉し其
上と壓へ又ハ長六尺横五尺深一尺二三寸位の從來紙漚を用
たり箱と取集め其底に材木と結付し一時通船に代用しその

橋も紙漚船も及ぶ所ハ四斗樽の鏡と扱て之に米と盛り繩と
付けし彼岸へ渡り又ハ人夫と集り漚と搗き河の向岸に
ある戰士に投與へ斯の如く種々様々の手段と盡し三日間の
糧食と續けし猶久く降續く時ハ第一佐伯三重市より本
營への運送も時刻を費し全軍殆困難に至べしと皆々額
と集り憂苦せしが同十一日に至り幸も前面の峯漸巔と
現し密雲次第に散去し世界隈に死晴天となりたる將校等
ハ大に悦び早速新橋と架渡しし以前の通路を開き全軍始
て安堵の思と爲せり有様なりされば肥後より進む官
兵ハ我隊伍の困苦と救ふに奔走し敵の一壘をも扱とあり



近世大平言



重岡洪水官軍
種々の工夫を
以て糧食と餉了

近世大平言

いざりしを最残念なりと雖是地勢の然らむる所より戦
の罪よあらざるを明白なり此手の官兵ハ初より人数も不
足なり一が遊撃隊の後詰ありしより其警備ハ十分なりと
雖戦線ハ深山幽谷に連て長さ殆十四五里且賊兵等無二無
三よ突破んと鋭兵を集て進て戦ふより總兵六千の兵ハ自
然と守戦の姿となれり然る先頃肥後の米良越に向ひ
たゞ第一旅團より遣され二大隊ハ遠く日州の沖と廻り八
月十二日滞なく豊後の佐伯に來着一上陸一と當地の
兵よ合併し直に右翼なる黒澤口よ宿陳せり諸此上ハ總勢
と合せ平押し日向に打入り賊の巢窟延岡と屠んと勇進と

扣ら明れ八月十三日ハ急報と日向の美々津を山
縣參軍ハ書狀到來一々ハ何事やらむとあるな一と封
と推切り開き見れば
賊の監軍を勤たる降伏人の口供に據れハ豊後路乃
總勢凡八千餘人西郷桐野村田逸見以下今延岡より
至其内諸兵と纏め激戦と高千穂を打破り豊後よ
切接け力盡と割腹せんとの見込の由又此外ハ口書
少からん稍信據なき者の如く就こハ今姑攻守とも
極く御注意之有る云々
とありたりはさきと一同に集議と盡しつと嚴重に警備

と張一が同十四日に至る我哨兵線より又あらたに馳歸
 本營に告ぐ曰當地戦線の前面に對する賊壘昨夜十二時頃
 より篝火漸々滅え彼が探拏の砲聲も曉に至ると全くと止む
 直様斥候に出ると探偵へしむる一賊の影は見えざると
 暫かりて又海口と警備せる軍艦あり左の報知ありたり
 細島の陸軍十四日の朝進撃の趣に付各艦延岡沖に
 廻り砲撃せし同所より喇叭と鳴し問もかく市中
 及城山は放火あり多分落城せしなりんと想像に
 依り此旨御通知し及ぶ
 鳳翔艦
 斯の如く諸方の報知何れも割符と合せあが如くありて賊

情大變亂と生ぜし様子明白なれば直様四中隊を出して諸
 道に分ち重岡より五里程先なる熊田の地方と探らるる本
 營より各々猶各所の警備と嚴しむる斥候兵の歸來を確報
 せりと待居たり

熊本縣權令人民を撫恤し大谷大教正大惠を施し

爰より熊本縣下は長々の戦争場となり故血氣の若者ハ
 賊軍の人夫を使役せられ農工の事業を從事せしむる
 されハ先祖傳來の田園は空しく荒蕪となり數世より傳り
 工業の忽廢絶は屬せし者少くは利己の家ハ兵火の爲
 灰燼となりて親戚の無難なる者あれば暫く此身

寄をりといふも親戚皆一ヶ村に連居し共々兵火に蒙る者ハ別は身と寄る方便なく他人の見さへも憫然かり熊本縣令の特の外苦心せられ其筋へ伺濟の上存の通其管下へ告諭せられたり

其区内兵燹に罹る者取調差出候に付調査の上其筋へ相伺候處非常の國費御多端の際に候得とも特別の御詮議を以て等級に應じ別紙の通御賑恤金として下賜候條此旨相達候事(別紙略す)但本月某日金貨被下賜候條請取として出頭可致尤賊徒の黨與を戸主へ下賜らば候事

明治十年七月二日 熊本縣權令富岡敬明

右の如く布達ありしに諸人の喜悅一方ならん比皆感涙と流たり其外又縣令より金二百圓大書記官北垣國道より金百圓と恵られり其外又至大なる善心哉起し縣下の人民と賑恤せし見真大師の門派と開れし真宗の法主大谷大教正より人民救恤金として金一萬圓と縣廳へ差出され其他末寺へ金百圓七十圓五十圓三十圓廿五圓と五等子施與せられ檀家へは總て米一俵と金一圓八十錢宛死者へは金三圓傷者へは金一圓五十錢又と長崎の軍團病院へ金千圓熊本病院へ金五百圓と納められたり

り、縣廳へ納められたる一萬圓の救恤金の猶此上りも數萬圓の金と足し、熊本縣令と深く熟議斟酌し、此金と以て猥よ人民は分與する時の被救人の心と急情をなすに止る外、なれば此上の永く右金貨と保存し、窮民一般投産の資本と供んと衆議此は一決し、縣廳の勸業課に於て此金と預り種々投産の法方を著手せんと苦慮せられたる、其頃熊本縣下は於て水車のかきと織機の器械を發明せし者有り、其資本の充分なるを以て、未だ着手せざるに、此事業は老幼婦女と雖之は従事し易く、且國産を増殖し、一般の公益を開く一大美事なれば、法主と縣官と熟議せられて、追々施行

をべきと決定せり、大谷大教正は猶も人民を救恤せんと、縣廳へ願濟の上、施藥場を開き、先七月より十二月迄と定て施療せり、醫貧の古莊有節と、中山至謙、其外五名なり、又去る六月十九日より、延壽寺の境内に於て、新説教場を建築し、此建築は大井了賢之と擔當し、六月廿六日、功と竣れり、此建築費用とし、金五圓を寄附したる者、英國人「ジムメチヨ」なり、六月廿七日より開業式を行ひ、同廿八日、戦死者の追弔法會を行ふ、此時諸方の男女群集し、さても戦後の渺茫たる焦跡も、立錫の地も、死程も、手品見世物、其外食物を賣るものも、皆路傍に充満し、焼瓦と赤列り、戦争中の苦辛は

此に至る始くお忘れなき有様なり是日歸教式と受たるもの
四千五百人あり此時有名なる五岳上人の左の二律と賦しと
大谷大教正は贈られたり

宗主何心不顧躬來衝炎熟火州中津梁多少經艱路教
誘慇懃答治巧為是堯年懸佛日能令法兩伴仁風懃勞
承得大師業頻向邊陲西又東

百戰開場國欲空熊城今日曠原同問閫全沒灰塵底老
幼看填溝壑中誘導偏勞身後道慈悲亦救眼前窮真宗
法主遙來蒞衆庶欣々草動風

日向の官軍頻に賊兵と破る事

却と説く薩摩口及人吉口より進たる官兵ハ難なく賊の巢窟
都の城と覆い夫より各進軍の部署を定めたり別働隊第一
旅團ハ志布志より海岸を推し海運の便利と日州は開くべ
く同第二旅團ハ梶山街道より山路を進んで、飢肥より宮
崎は達をべく同第四旅團と三浦三好の二旅團及新選旅
團ハ霧島山の左右より連絡し日向と北へ押切り山田少
將の手ハ賊の肥後路は逃るを防んが為其通路を断切り、
漸海岸の方へ押出さべしと各軍議一決せしむ此勢に乗
り豊後口の官軍は抗敵し毒爛を逞る賊兵の後背よ
迫り一舉して賊徒を搦破んと明れば六月廿五日午前第三

時より支度と調へ大山少將の手ハ既ニ梶山ニ向テ軍を進メ
 一ハ賊ハ前日の敗軍ニ恐怖シ皆何地ニ逃去ク今二人の
 影ヲ見ズ然ルニ第三旅團の先鋒ガ梶山と三股の中間
 と過リ當テ傍の竹林中より俄然トテ發射セリ是ニ
 ン梶山の殘賊ガ六七十人埋伏ト官兵と隘道ニ狙撃セシ
 者ナリ官兵も之ガ爲ニ一時大ニ狼狽シ是時大隊長八木氏
 ハ足と射られ兵卒三四人負傷セリ第二番より進テ一大隊
 ハ之と聞テ直様賊兵の後ニ迂回シ山腹ニ攀登テ賊と眼
 下ニ視下シ狙撃ニ烈ク頭上より發射ニ及レバ賊兵等ハ大
 ニ驚キ皆險岨と踰テ逃走セリ是より先路ハ更ニ一賊の刃

向テ者無クテ直ニ進テ本營と梶山の士族屋敷ニ移セ
 リ又此日ニ曾我少將の手ハ山の口ニ於テ殘賊と破リ其地と
 奪取セリ同廿六日ハ里程三里と進テ板屋へ入レバ此日ハ
 三浦少將の手も進テ高城と陷レ新撰旅團及三好少將の
 手と連絡セリ然ルニ此日第三旅團の先鋒より傳令騎馳
 テ大山少將の軍ニ來リ告テ曰賊ハ板屋と距テ二里をテ
 リの處ニ壘壁と築キ險阻より嚴重ニ守備と爲セリト
 我兵ハ之と聞テ馳向テ一もみも乘取んと其夜の明テ殘
 待ミびハ明テ六月廿七日昧爽より馳向テ先ニ中隊と以
 テ正兵となシテ敵の正面と突テ又別ニ二隊と以テ奇

兵と多しと敵の左右より迂回せし此迂回兵は何れも溪
間と曰ふ賊の左右より出賊の壘壁より又一層高き陵を攀
登り敵兵と眼下に瞰り烈く銃炮と乱射し正面より向ひ
たる正兵の勢を助く賊に向背し敵を受く其勢の敵を
べかりざるとも入り壘壁を奔走し逃走せり官兵は透き之を
追うると田の尾村より古見村に入哨兵線と張り曾我少將
の四旅團が山の口より來ると待ちし抑梶山より田の尾村
まぐの間へ山岳嶽々として相連り深谷其間を盤行しと
徑路の山と踰え谷は渡り其險難なるを殆人吉の山中に
譲らば而して田の尾村に至る山脈全絶え曠々たる平原

數十里を連り其東南に望み遙く海水の蒼々たるを見
ふ又宮崎へ田の尾村より四里許の先あり其前面より
脈の大河ありといふ翌廿八日午前第八時板屋の本營
と移し相又村の戸長の宅に移せり此家の先日中を賊軍
の銃丸と製せし場所を賊等へ此邊の鍛冶屋を集めて
銃丸と造りし其の其棄置たる者と點檢せし鉛の多く
盡たりと見え鐵を以て銃丸の太さ長き棒を造り片端
より次第に断切り少く其先と尖らるる造り片
小別働隊第四旅團の兵は相又村より二里先なる大久保村
に軍を進りが賊の中村川の支流大久保川の對岸あり

丘陵の險は據り盛は壘壁を築き左右の翼を伸し防禦せ
り官兵の之を見より一舉に採破んと爲たれども賊兵益
堅固は防禦を張り其人數追々加り勢益盛なれば急小
傳騎と馳り大山少將は援兵を乞ひ少將は直様一中隊
の應援を操出し四旅團の後背を以て嚴重に警備せり
四旅團の兵は既に後背を絶たるべき機念をなれば此上手詰
の勝負を決せん者と進みながら銃鎗を装ひ漸賊壘に近づ
うと見えしがどつと揚り一聲と共に忽賊壘に跳入り縦横無
揃に突立たり賊兵も此勢は辟易し色めき立ち見えたり
が忽大崩となり中村と指しと落行たり又一手は扣し右

翼の賊は此一寸も退りしと力と究つ防禦せり左翼の己も
退たると其勢孤島の囚人の如く思慮多く味方と損せんも
益なきとて同夜は中村へ引揚たり翌廿八日猶も賊を驅
んと早朝より進軍せしが最早川の手前より一人の兵卒も
見えざりければ第四旅團は直に中村に入り賊と赤江川を
隔て對陣せり抑此赤江川は日向第一の大河なり其幅殆
四町あり向岸は繋る馬と望見れば其大さ猫の如しと
いなり、

官軍進ぐ延岡と陷る事

三好少將の手に六月廿九日は高岡を攻撃し同所を陷る

更に進む事一里半より倉岡は哨兵線と張たりしが折ふ
 一三浦少將の手も二十日と以て高岡に到着せしより三
 好少將此の手の戦線と三浦少將は譲渡し一旦高岡を引
 揚ぐ山田少將の兵と合し別は延岡と突んとせし又警視
 隊も去れ廿九日より倉岡は出張し三浦少將の手と共に六月
 三十一日より宮崎の賊軍と突んとせし明れば三十一日警
 視隊及び三浦少將の手は共に進ぐ宮崎を襲んとせしが赤
 江川の一脈水勢甚盛し容易に渡るべきはありぬ遙か
 赤江川の上流に遡り宇船牽川と唱ふ較川幅の狭き所と
 濟んとせし此も賊兵等へ兼て對岸は胸壁と設け半渡

るを以てと撃んと静りたり待ひたり官兵も一時を思
 案よこれたゞしがやがて三浦少將の手より大砲數門と川端
 へ並べ破裂丸を裝ふ距里を計り狙をゆるく發射せしが
 誤りて賊中も破裂し壘中の動揺一方なり又も射うく
 る破裂丸は對岸ある宮鶴村も破裂し忽ち民家へ火移て
 賊の背は燃上り時は東南の風烈しく見ゆ一面の大火
 とあれし賊壘は大に狼狽の有様なりこれに警視隊の面々
 へ之も氣を得て水中に跳入り逆まき水とこととせし抜手
 とまきつゝ泳たりしがさても大なる急流も難なく泳渡り對
 岸に繋ぎ舟を奪來り然るも賊も兼て斯くわらん推

察せしや、其舟の舳先の何れも皆破壊し、大勢これに乗
 時の忽沈むやうを爲し、故に始の中の五人死と渡し上
 陸し、激戦跡あり、進み終るに多人數を乗せ中流
 まどく來るや、否舟の忽沈没せり、幸に人命を失ふに至らざ
 れども、銃器刀劍の類は皆全く水中に失たり、然れども斯の
 如き舟一艘は止り、他の皆能く兵士と濟し、これ追々と
 入來る新手の賊兵に力屈し、宮崎指く逃去れ、皆宮崎の
 賊徒に追々官兵の突入を憂ひ、延岡の邊より精兵六
 七十人と呼集り、舊宮崎縣廳の前を於て、他の隊伍は編入
 せんことをせし折ふ、船牽川の固め破れ、官軍既し近づ

きたりと聞き、此精兵を用ふ及むべく、皆右往左往、散
 乱し、佐土原の方へ落行たり、桐野其外の諸賊魁は昨夜を
 對岸の樓上よりあり、婦女を集め酒筵を開て、前途の長ら
 らざると慰む、第四旅團の官兵は川向より、夜風の弦
 聲を送り來ると聞き、竊に歎羨の情と起し、又罵る最
 後の酒宴ありといひ、あへりといひ、桐野等の此世の外の思出
 ふ、うづる遊興と催をこそ憫かれど、之が爲に士卒は心と離
 され、連戦連敗する基とこそなり、とぞ官兵は宮崎を奪
 し、後の直様宮崎の舊縣廳に入り、賊兵が前日やぞ施行せ
 し様子を探ると、賊は此舊縣廳を軍務所と爲せしものを

金錢遣拂の帳簿等其局中は散乱せり、又此縣廳の二大室
 の負傷人と入置くと見え、其室の周圍に壘と積上げ
 又其上へ布圍をかけたる體、さなるの壘壁と築きたる如し
 是患者の居る處へ官軍の射發せる銃丸の及むる爲なる
 べし、又宮崎より二里許ある海岸に内海港といふ所あり、
 賊兵は此所よりと嚴重なる胸壁と築き、軍艦と見えれども、
 類は炮發し、たゞし宮崎の陥、頃の後背に敵と受んと恐
 れ、其炮臺を棄て何れへ逃去れり、我軍の築波艦は其時を
 みて上陸し、盡く賊の大砲を分捕たり、さても警視隊及第
 三旅團の宮崎にお入し、時ハ川と隔て對陣せし、第四旅團

の兵も直に進み、川を渡り、第三旅團と共に敗賊を追撃し、
 進む事二里許日既、西山に傾くと以て、此日の軍勢を引揚
 たり、同八月一日、山田三好の兩少將一擧し、佐土原と抜
 け、此手の賊は己に逃るべき前路と絶切られ、向背に敵と
 受たる勢を、一支部もなく潰走し、高鍋の方へ引去り、三
 旅團四旅團も透き、賊兵と尾撃し、高鍋を押し寄せ、
 八翌二日、二四の旅團勢を合し、高鍋を攻め撃つ、賊も
 随分堅牢なる胸壁を築き、此破られしと防戦し、あむ雌
 雄も決せざりしが、ついでに、賊兵を卒然に狼狽の色を現
 し、我先と道と争と逃失たり、跡もなく其所以をきんむ、

別働隊第二旅團が、つらの間より迂回して高鍋の側面と突たる故なり、夫より三四の兩旅團は直よ木街道を追て進たりしが敢て其進路を妨る者もなく、同三日より美津の近傍まで來着せり、同十二日は別働隊第二旅團へ山陰までくお入らば此日同隊へ降る者六百人あり、此日第四旅團の兵は細島の一里先なる門川に於て賊兵と接戦せしが賊は遂に川の對岸まで逐つめられ一面は嚴重なる胸壁を築き必死と究て防戦せり、其有様容易は抜き難く見えたり、新選旅團の兵は此時こそ士旅の面目を現さんと遙か上流に遡り難く此川をお渡り沿岸の賊を追拂つ午後に至る

四旅團の對岸なる賊の陣中へ突入れば、第四旅團も是より力を得て直よ其川をお渡り、新撰旅團と力を合し、此手の賊と追拂ひ哨兵線を設置し、敵の襲來を備たり、同十三日の延岡を採破り、一舉して賊の巢窟を覆んとせし、兵士もいたく瘦れたれば、此日の先づ休戦と定め、四肢を伸し、連日の苦辛をととき、十四日とこそ待居たれ、明れば十四日の早朝より支度と調へ、海道山道の二道より平推し、攻行し、賊徒は加草と土々呂といへる中間の天然自然な壘壁を備し、如き險阻は據り、猶又さら茂木を引合せ、非常の堅壘と備たり、又山手は青竹の太を撰り、竹柵と二重に結ひ、街道

又ハ幅二間ともむらもき土壁と築き精兵と充て大小炮を
 並構へよむべおんと待つけたり斯の如き天險は據り刺賊
 の陣中物音もなく静りかへりそ扣なるは必死と究ゆふ疑ふ
 ければ官兵も頗る其技がなまを知りたれども柔と侮らば強
 と懼れざるは是をん兵法の習なれば斯の如き小ざりもき
 敵ある却腕の例もなめと大膽不敵も間近く攻
 寄せ大小炮をお交り烈く賊壘を乱射せり相方より射出
 した弾丸はさながら雨の降来が如く或ハ賊壘の大石は觸る石
 は未塵は散乱し或ハ官兵の車輪は射く見ろく鐵車輪と
 碎とつども更は懼る氣色なく余所目も觸れ血戦せし

有様のいづ果べきとも見えざりたる然るは賊の遠は色免
 立ち引退んとする様子なれば官兵も大に疑を生じ未
 だ勝敗も分たざる何とぞ斯の狼狽をなると不審益解
 ざりざるが跡よくよく之と聞るべ別働隊第二旅團が二
 三日前より別小山手の隘道を進み又向ふ敵をお取く
 第一番は延岡へ進入せんとも疾く馳せしが今ハ既し延岡へ
 お入んとする勢なれば此險阻を守り賊も後背なる延岡既
 は陥んとするを聞き今迄盛に警備せし險阻を棄て周章狼
 狽と走りたり此手の官軍は勝を乗と益進み木日午前
 第九時延岡より達したれ至り見れば案の如く別働隊

第二旅團ハ既ニ延岡ニ在ナリタリ又肥後口ヨリ侵入セシ野
 津少將ガ率タル第一旅團ハ先日ヨリ頻ニ延岡ニ衝ク事
 不苦心セシガ此手ノ賊ハ最剛壯トシテ容易ニ打破スルコト
 故ニ今日延岡ニ入ルハ最後ナリトシテ又第四旅團ノ
 兵ハ延岡ニ着セシ後更ニ一里ニ進ク戦線ヲ張り豊後路
 ノ後背ヲ突クガ賊徒モ死者ガ多ク防戦シ十四日ノ夜中
 ハ更ニ戦ト休ム事ナク炮撃ノ間ニ抜刀ヲシテ切入リたれば
 此手ノ死傷最多ク同十五日ハ鹿兒島以來ノ劇戦トシ相
 方ノ死傷少カラズ黄昏ニ賊遂ニ敗走シ熊田ヲ指ク逃
 走レリ翌十六日ハ午後一時ヨリ戦ニ交ルガ賊ハ何如ナ

もしく官兵と打破リ延岡ノ地方と奪返さんと息ともつ
 うに接戦セリ官兵も此は敗衄と取時ハ千日ノ苦辛一朝
 泡とたると踏込く血戦一實は古今未曾有の大劇
 戦と云此日第四旅團ノ一手ニ打破リ賊兵のみよと二百餘
 人ノ多し及べり此中ニ婦人一名ありしといふ今我筆を下シ
 て此に至リ爲ニ悲憤數回一泣浮筆と沾シテ文跡を亂
 りと知らず嗚呼賊兵と雖亦是 皇帝の一赤子トシテ吾
 輩三千餘萬中ノ兄弟ナリ賊魁一人ノ謀逆ヨリシテ數
 多ノ兄弟相共ニ方向と誤リ屍と原草の上ニ暴暴ト是
 固ヨリ賊魁ノ強峻ニ出スルと雖抑亦賊ノ強峻雷同セリ

つゝの罪ハ其又誰あり在や、是皆學術明ならん、
時勢を知ざるの招く所なり、嗚呼後の君子、宜く鑒る所
あれよ、

賊徒訣別の酒宴と催事

扱も八月十七日の夜賊魁西郷隆盛ハ桐野利秋逸見十郎
太等の諸將を集めて曰我今熟考する、最早味方の総勢二
千は満ち、糧米彈藥も其は盡さんと、我諸君の爲は、大將
と仰うれ七个月の間官軍は抗敵し多く士民を傷し上此
山と官兵が十重廿重に取圍は、逆も遁逃する道なきなり、
今隆盛の運命此は極なり、一士族の身と以て、國中の大軍

と引受半年餘り接戦せし、身は取その本懐、今更く遺憾なし、
死をべき時は死せざれば、死するも勝る恥多しと云り、諸君ハ
官軍に降り、身命保存を計らるべし、我首級を以て降伏
せざるは、重く用るべしと云捨て短刀閃然と抜放ち、既に
屠腹と見えければ、桐野逸見等大に愕き、大將の御
詞とも覺えん、始り事を擧げ、生死を共にせんと盟約せ
し我々、今更降伏し、永く保存を計れと、何事を漢の劉
邦ハ楚の項籍と戦ひ、七十餘度の敗軍も終り子房の謀は、仍
て楚王と亡し、漢の高祖と仰うれ、四百餘年の基を、開き日
本の足利尊氏も萬死と出で十三世の祖公と仰うれ、其他枚

擧子違わん御身此所より死せざらん今屯集せる兵士の中、決死の者と撰擧し、今一度官軍の一隅を討破り、山間を經て故郷鹿兒島に突出し、重く再擧を圖るべし、事成されば外國に航し、歴山翁拿破命と師と、宇内を併吞せん若くは微運より勢感り力盡は其時潔く戦死し、人間に七生なく君側の姦を掃滌せん如何と代りて諫るる隆盛欣然と笑て曰、元來望む所なれども、諸君の心一致せば、行ふべき事なむね、心底を試んが爲、斯は計りしと也と、速く士卒を集り各議論を尋ふ、或は曰ふ、朝敵の名を殘せしと、本來快きこと非ぞ、降伏するは如しと、或は曰ふ、一度義を擧し上

死し後止ん命限り、他方へ突出せん、依り其黨と二ツに分ち、離別の酒宴を爲し、隆盛は小歌を謡ひ杯々愉快の躰を示たり、桐野利秋は生來大酒を飲とき々涕泣の癖あり、先年會津征討の時、官軍は加り、容保父子の降伏は方り大に位と曰く、往昔我島津義弘父子が、豊太閤は攻られ、軍門は降り、もかく社より、潜然と歎か、今又士卒は訣別を深く歎き悲しむ、これ離別の酒宴を爲し、降伏論の者より、明日官軍の軍門に至るべしと直之を歸ら、突出論の者七百五十人計を率、夜半より可愛嶽より出陣せり、且又同夜賊の病院を親く巡廻し、負傷者を告て曰く、



是やど互は互は互は大義と思ひ立ち、各の協心盡力は依と永く軍威
と耀せしが、最早力盡て事此も及べず、我輩は明日此所を去
り、敵の一方と切崩し、他方は突出せしむるは確定せり、永々の厚
志懇情言語は述難し、且我輩此所を突出せば、必官軍の入來
る事必定なり、然れども各の病者負傷者なれば、院前は降伏の
旗を掲げ、罪を謝し、殺傷の難を免ふべしと懇々と説諭し、訣と
告り、歸りたりと、西郷は常に居所とて、人を知りぬ、他出の時
は長持を入り、上は油紙と庇ひ、人夫は擔をせしむる乗歩行しが、延
岡落去の後、駕籠を乗り、又自身も歩行し、所在を人々
秘すともなかり、又常に一間に入る酒宴となり、ナンゴ拳杯浅

おと慰居たり、且十七日頃迄は軍服を着せしが、同夜突出の
策を定めて出陣せし時、唐棧の着物は、横鼻禪帯と纏ひ
草鞋と穿ち、出掛しが、其後も宿駕籠を乗り、通行し、其宿
營の一夜の内時々變遷し、更に居所を定め、おと降
服論の者の各所々は白旗を揚げ、官兵の至るを迎へ、皆陣前
降伏せり、降賊の景況を察せしむる延岡落城の後、賊中糧米
少々、時々麥の粥などを分配せしむる由、且春來の戦争は、梳風
沐雨、炎天は曝され、寢ぬ夜も幾度あり、枚擧べしむる食
を得れば飽かず、啖ひ無れば、餓え、髭鬚生ひ、色黧く、齒屎の
口を埋む計り、眼光燦然とて、星の如く、衣服は破れ、肌を露し

更人とい見えやれば夜刃う鬼界の罵人かかいはらめと想像
く憫然なり、中よ婦女の降服人も有り、是皆傷者の看病人
多く多く麻兒島熊本の婦人なり、斯く一彈とも發せざると降
賊凡そ三千五百人許と得たり、

賊魁西郷官軍と破て可愛嶽の絶頂と奪ふ事

かゝる賊は日向國可愛嶽の麓なる、ヒヨウノ村と根據と、この
傍二三十町の外に戦線と張ると雖前敗は氣力挫け、死力を
盡く防禦んとする者甚寡く、官軍の旗色と見ると降伏すべき
景況なれば官軍の機に乗じて賊兵と塵よせんと、八月十八日
大進撃の約と定め、午前第四時豫て可愛嶽の絶頂に野營

と張りたる、第一第二の旅團と以て本營と、僅の護衛兵と殘
し置其他の兵と左右に分ち、ヒヨウノ村の東西より進撃せり、
然るに一賊の防禦する者なく、扱き日來の戦は疲れ熟睡せ
るに相違り、いざや一擧に撃滅せんと猶も近く馳せ寄るに
度子関とどろと揚げ、直に賊營に馳入る、此はそも如何に賊
兵に已は此所と去る更に影なきに、神出鬼没の賊兵やと、
齒と切ると罵つ、あべー憫れと茫然たり、されども跡は武器雜
品と多く捨置なれば官軍の勢は辟易し、風を喰て逃去り、と
猶進軍の方向と議せり、かゝる所は賊將等へ前夜訣別の酒
宴とあり、突出の謀と定る、孤軍と分布する、ハ策の得る者

おあつらひ勉て一團とけんべりて、斥候と出く官軍の哨兵線
 と窺ひ空虚の中堅と一楚せんとも、既にヒヨウノ村の根拠と
 發し桐野貴篤の三百人將とて先陣なり、中軍ハ西郷
 親ら三百人將とて、後陣ハ逸見百五十人と將ハ村田別府
 其外以下の諸將ハ今日と以て最後の戦と志と決し、崢嶸
 たる山と踰え林と回り溪と渡り可愛嶽の絶頂に達し、第
 一第二旅團の本營へ不意に突入り、此日大霧朦朧とて、
 山の巔を己の人影模糊とて咫尺と辨せん、此第一旅團
 の司令長官陸軍少將野津鎮雄ハ今日の勝敗何如あらむ
 と心と配り、先手の報知と待居たりしが、炮聲忽耳元より轟

まければ、少將ハ此我兵の過からん、此近傍とて、叩き發炮を
 勿れと叱り、言を未だ終らざるよ、彼一發と相圖とて、四
 方より鯨波とどろと作り、賊兵ハ抜刀とて短兵急に進み來り
 故備ハ賊の謀計に陥ると、前後と顧る暇もなく、麓の方
 へと引退たり、第二旅團の司令長官陸軍少將三好重臣も同
 く危急の場合なりしが、兼て強壯の聞えある近衛隊の狙撃隊
 野津少將の護衛なれば、恐色なく應戦し、其他併せると八十
 人許必死と盡し、防なり、然れども賊ハ屈する氣色もな、多
 勢を以て烈く攻撃し、たれば心の金石も固めたる勇士なれば
 寡兵の上より不意と撃れりとたれば、殘寡く討たれ、或ハ

重傷と蒙り、深谷に陥る者も多かり、其際、兩少將及び
參謀部の人々、辛うじて虎口を遁れ、日の谷と越え、味方の
軍は達せりと得たり、往昔漢末の劉玄德が潭溪を踊越え、虎口
を遁れ、其時、かくやと想像し、聞かば、膽を冷し、閑語
休題、嚮は賊營の空虚と襲ひ、夫望をたら、捨置たる器械を取
纏り、賊の踪跡を偵察せり、折柄、我嶽上の本營に當り、俄然、
發砲の聲、頻に響き、賊の逆寄と見極められ、直に兵を嶽上
に引上げたり、道々野津三好の兩少將は出會ひ、有し始
末と聞と齊し、一同に切齒扼腕し、速に可愛嶽の絶頂と
奪返さんと、兵士と分ち各絶壁を攀登り、激烈に嶽上の賊と

砲撃し、四方より嚴く攻立たり、故に昨十七日、絶頂に在り、官軍
も本日、分峯と占領し、賊は昨日、分峯もありしも、本日、
絶頂に據り、其位地、此に一變せん、時、午前十一時、官軍
新手を入換へ、嶽上の賊と攻め、縦横無楯に攻立れど、賊は所
謂、死物狂の勢、更に屈せど、日暮に至れども、未だ勝敗と
決せざりし、つ果やうも見ざりけり、

賊兵等三田井より出で、官軍の糧食を奪ふ事

八月十九日、拂曉に至り、可愛嶽の賊等、西面の麓より下り、濱
子村の東方より突來し、暫時劇戦を、雖兼て強壯の聞
えあり、第一旅團の近衛兵一大隊を以て、嚴重に警備せり、

より抜くことありて、再嶽の中腹より引揚り、忽ち方向を轉じ、北方の山脈を廻り、分隊を以て熊田方面の官軍に向ひ、本隊は又濱子村の北の口を襲へり、官軍は爰より先途と戦つ、賊を撃取ると頗多し、賊遂に破る、濱子村の東北に當る山上より引揚げ、夫より西南の山脈を傳ひ、堀川村より出るも、同村より第一旅團の兵一大隊警備せしが、今朝濱子村の戦に應援とて、三中隊を繰出し、跡を續け、一中隊は村外に至りしが、突然と賊兵に出會ひ、霎時の挑戦に、官軍を寡兵にして防ぐ能はず、今村堀川峠等は引退たり、濱子村より戦へ、官軍は直に兵を出して、賊兵を尾撃し、追躡せし

る、賊の後軍を堀川村に残し、追來る官兵を防ぎ、本軍を師子川村に泊り、尾撃せし、官軍は夜に入り、戦ふと雖、遂に賊を敗る能はず、今村の官兵は日没より已に彈藥は盡し、たれば、廿日の午前第五時に至り、中川村より引揚たり、賊は曉に至り、一手の兵を残し、諸白戸の口戸川等を經り、山道を傳ひ、廿一日の朝岩戸村より朝飯を喫み、夫より三田井の本道を出たり、官兵の程を兼て之と追ひ、雖遂に及むが、實に遺憾の次第なり、又賊の三田井に入らば、豫て同所は備ふる所の一旅團の糧食分配所あり、且遊撃隊も三十人許詰合しが、不意に襲はるとなれば、防戦叶難く、皆四方

散亂せり、依る賊の所在の金五千五百圓并白米數千
 俵と奪掠り而して曾木より三田井に至る本道カバント坂
 へ守兵と出し、岩戸川を隔て追來る官兵と防たり、去程に
 曾木より進たる官兵の既の間近く寄來り、彼所を霎時戰
 一が日も西山は傾け、此の日の戰を止め、明朝再舉して、攻
 撃すべき手筈なり。賊の夜半より竊る兵を引纏め、肥後
 の國なる馬見原の街道さして落行り、兼て五ヶ瀬川の南
 岸通に進る官兵早くも謀とく之を知り、三田井と右よりし
 賊の背後を廻り、前後より引包で撃滅さんと其先駈竹迫
 村に至り、一端なく賊軍の中間より出られ、直之と砲撃せ

り賊の狼狽擾乱し、一手の馬見原の方へ走り、一手は又三田井
 の方へ引返して暫く防戦せども、遂に敵を能く山道と巡る
 逃行たり、官兵の追々三田井に會し、守備を嚴めて賊の踪
 跡と搜索するも、本軍の馬見原に向ひ、後軍の岩神道へ走り
 たる趣より、廿四日官軍兵と二手に分ち、一手は岩神に遣い、
 一手は馬見原街道さして追行たり、是より先熊本鎮臺兵
 の電報と得て兵を國境より出し、警備を設け、馬見原に入り
 て胸壁を築き、賊の前路を支たり、賊軍の其破り難きを察せ
 し、よや方向と換へ道と坂本を取り、夫より七ツ山を走り、又
 三田井より岩神と差を走り、賊軍の必竟豊後、肥後路

へ走れりやうんと認め、官兵之と追躡せしが賊兵ハ一旦岩
神に至り夫より田原の方へ向ひ五ヶ瀬川の南岸より、柴原
と經て直ま七ツ山の本軍と合し、つみ成て同廿三日の朝廷
岡方面より進た、別働隊第二旅團と交戦を時、三田井の
方面より賊の跡と慕ひ來れり官兵ハ既馬見原近傍に至
り賊が坂本道に赴たると謀知し、又兵と二手に分ち、一馬
見原に入ると、同所ハ所在の熊本鎮台兵と連絡を取り、充分
備を整て後胡麻山に進み、熊本及び人吉口の街道に備へ、
一ハ賊の跡を附て坂本通りを七ツ山やぐり、遂行しが、已に今
朝一戦せし跡、此方面に在る別働隊第二旅團の兵

員追々満備し、別働兵と要せざれば、其儘胡麻山に引揚げ、同
所の兵と合併せり、

賊兵大隅の飯野と經て、麻兒島に走る事

去程ハ賊軍ハ十九日、可愛嶽と突出せしより、交戦止む時な
く、右に逃れ、左に避け、或ハ東へ走ると見せ、西に隠れ、北へ行
まね、南に遁れ、出没不測の振舞かりしが、廿三日別働隊
第二旅團の官兵と七ツ山に戦し、利なきが、又方向
を轉じ、下の八重穂白毛寺、木合鴨、八重松ヶ平、惠合崎山
三个所、山瀬等と經て、神門へ通過し、同廿四日午後二時、ろ
同所より鬼神野へ出る途中、兼て配布せる所の別働隊第

二旅團の官兵は出會ひ直に戦て交ふ、廿五日の朝に至る中、晝夜の劇戦雙方互に死傷有ども、終に官兵は攻立られ大崩れとなりて敗走し、又道と西南に變じて中渡川に走り、又も官軍方の軍議も、今度賊兵の可愛嶽と突出るや、豊後口へ走り、又へ肥後口へ走り、熊本城と乘取、糧食器械と掠奪し、再舉と圖り、事叶わぬば花々敷討死する覚悟をせん、迎大に兩國の守備は注意し、豊後路へ谷少將の率たる兵隊を以て諸口と警備し、熊本へ電信を以て警と報し、又延岡に所在せる第四旅團の兵と悉く軍艦に乗せ、海路より熊本に廻し、別働隊第一旅團の兵は先

發して去廿二日既、杉橋に上陸し、直に矢部の濱町に著せし折、賊が馬見原邊に出る頃、第二線の守備は轉になり、かゝる所は賊は肥後豊後の兩國に入らば、様々方向に轉じて七ツ山に至り、七ツ山は此邊の要路、肥後の人吉へ通ずるの道も、これに賊馬見原の破り難きより、道と此處に取れ、人吉に出入り、熊本に迂回するを、軍議又變じて、延岡にある第三旅團の兵と軍艦を八代に廻し、賊の前路と遮蔽せしむ、去程は賊は又方と變へ、神門に出で、別働隊第二旅團の兵と激戦し、中渡川へ赴き、茲に又廿五日の夜より廿六日に至り、大雨盆と傾るが

如く降濺ぎ、風さへ激く吹荒く、河々の水漲溢れ、橋の墜たす
所も多し、所々の通行止りたり。賊は廿六日、中渡川より肥後
路に入り、銀鏡村を經て、米良の莊、小川村に泊り、廿七日、山谷
の間道と傳ひ、廿八日の夜、大隅國飯野に泊り、廿九日、加久
藤に入り、道と吉田の方へ轉たりとぞ。官軍もこの賊の追手
に進み、別働隊第二旅團の兵、二中隊と加久藤に遣り、一中隊
と飯野、小林、又一中隊と第一旅團の一中隊と合し、吉田地
方より發遣し、猶一中隊の兵を以て、吉田と大口の間にある野
田より出、賊の跡を追たり、賊の方向と熟考する。豊後
路熊本路にも突出せし、人吉宮崎の方面へも向ふ。加久

藤子道と取り、吉田地方に進むと見れば、鹿兒島を以て目的
と爲す決心とを見え、さうなれば、鹿兒島に渠等が墳墓のあ
り、地なれば、該地も快く討死せん事を求むるなると、その評
議を成す。

賊徒加治木の圍と切抜夜に乗、鹿兒島縣廳へ
薄す事

却て説、賊徒等、廿九日、飯野より、加久藤、吉田、吉松を經
て、栗野より出、直に鹿兒島街道を進行し、始め、小林
飯野の邊より出、此近傍へ、過般都の城落去の節、降伏
したる者共、數多各自宅に禁錮せられ、在る。西郷桐野等

様々説諭し云る中、汝等自宅に禁錮せらるるとも、當今
朝令暮止の官令なれば、終まれば又慘酷なる刑に處せられん
事必せん、あり我等に従て再威名を顯さん、事若成ら
ば、花々敷討死する武士の面目を思はんやと様々騙し
或の權威を脅され、頑愚の者共三百名許一時之は應に既
に行装を整へ尾從せんとせしごとと、加久藤近傍に進入し
たる官軍を中断され、猶豫しく社居たり、又賊の嚮ふ
延岡より軍艦を、加治木へ廻ら、第二旅團の本營へ不意
に襲撃したり、諛本營の三好少將僅少の近衛兵隊率
に宿陣せし所なれば、猖獗なる賊勢を攻立てられ、少將を守

難きと察し、一士官と鹿兒島に馳り、急を援兵を乞はる、
かゝる所は日向方面より賊を追て進たる第一旅團及び別働
隊第二旅團の先鋒も、漸に追付られ、直に部署を定め、加
治木と横川の間に賊軍を取圍ひ、揉揉と攻立て、賊に死
力を盡し、防戦し、夜に入ると一方と切抜し、暗黒に乗じ、延岡よ
り六十里許の行程を馳せ付け、突然と鹿兒島縣廳に押寄
たり、途中巡査の巡行する者も逢へば、必慘酷を極く之を殺害
し、或の官服を奪ひ、頗る残忍の振舞をせり、

鹿兒島縣下再度騷擾の事

九月一日午前十一時過、賊兵突然と城山より、砲聲一發を

や否、賊社押寄来り、直に戦と交り、賊の元の私學校
 と根據となし、頻に發砲し、大小の彈丸兩霰の如く飛散せり
 中は百有餘名の賊兵を、手おし、白刃と提げ、老幼男女が路伐
 失ひ、逃迷ひ泣叫ぶ、其中、右往左往、駈廻り、本營目懸く、葛
 地に攻來り、景況、阿脩羅王の荒たる如く、當りと幸ひ切立難
 立寄來り、官兵の正面左翼より、邀撃と雖、賊鋒銳と當
 難く、屢苦戦し、一先引揚げ、夫より本營の方位と固守し、新
 撰旅團と海軍の兩兵、左右側面と守り、防戦と雖、賊輩
 遂に本營の左右翼と迂回し、海岸の連絡と絶ち、正午十二
 時より接戦甚しく、互に死力を盡し、徹夜戦ひ止むけを、

綿貫少警視、營外と検査の爲、一等少警部中川操吉、二等巡
 査菱沼勤一郎と傳令使と、警視隊二十名と率、米倉の裏
 手より出營し、營外近傍と檢察し、既に野上橋邊に至らんと
 する際、五六名の賊潜伏せしと、早くも認め、直に令し、之を
 打拂ひ、尚其所彼所と検査せり、賊は之を狙撃せし、憐む
 べし、中川操吉、忽地彈丸の中、斃たり、菱沼之と肩を抱き、
 營中へ歸り、尚も檢察の事を注意せり、兼て警視出張所へ備
 たる、エレピール銃七百挺の内、二百挺、彈藥五万發と米倉本
 營へ運送し、其他の器械、彈藥、残らん、鹿兒島丸へ積込、
 猶入用の員數を、隨ひ船より運輸せり、故に銃一丸の紛失

もたつたり、去れども新撰旅團も、辨天臺場も備たる白砲
 十二樽八門四斤半四門、彈丸若干、遂に賊の爲に掠奪せし
 たり、此時諸團の將校兵隊も未だ悉く麻兒島近傍に到着せ
 ぬ、又參軍河村海軍中將も、本月一日麻兒島灣へ着港の日
 割たれど未だ着港なく、且海岸の連絡を絶たれ、陸に諸口の
 援なく、且一度歸順せし士民と雖、再び賊に應ずる者有べきも
 計り難く、細小なる一營は嬰守する人々の安き心も無き、去
 とも屈する氣色なく、猶も勇氣を擴張し、協心同力して守備を
 勉強し、援兵の來ると待居たり

米倉の官兵奮戦し、諸手の官兵と連絡を通する事

九月二日、猶も對戦止ざりしが、午後二時頃城山の頭より突然
 と大砲を放し、直に官軍の營中を破裂し、彈丸は中で斃る
 者數名に至り、去とも諸兵は更怖る色なく、怒氣充滿し
 て、尚一層奮勵せしと令を受け、各力と盡く防戦せり、かくて
 官軍の營外にあり、賊兵の連絡を絶て、賊を討拂んとせし共
 兵少く、破り難く、軍團援兵の本日必だ着港せしと告
 げられ、團兵の至ると待ち、兵と合せし討破らんと、軍議數刺か
 へびたり、午後七時に至り、果し岡本大尉第一旅團四中隊
 と率て、涙橋より上陸し、海岸をむせし、賊兵と逐破り、連絡を
 通して、營兵は合し、營兵は十分の力と得、猶も軍議を爲

多々、此時參軍中將河村純義陸軍少將大山巖も共に入
 港有りとを、此夜賊の官軍の營を襲んと謀り、營門向の
 人家に放火し、延く米倉も及ぶと謀り、我兵啣水筒と
 以て之を防禦し、又私學校の正面の右側を、大立目隊の持
 場へ白刃を携へ、胸壁を攀上らんと、秘術を盡く攻來れども、
 豫め之を謀知し、速に賊を逐拂へり、斯く官軍の市街の四面
 へ火を放ち、賊が潜伏をき場所を焼拂し、火氣焰々として、
 天を焦し、暗夜も白晝の如く、飛散する大小の彈丸も、
 雨雹と降かり、抜刀の兵は互に、あまき、削り、火花と散り、
 々々、と撃音の修羅の街は異なると、呐喊叫喚で闘ふ
 景況實に未曾有の激戦なり、此一戦は忽諸路の連絡と通じた
 るを實に心地よき事也、此日細島なる總督本營より、各旅
 團へ左の告諭ありたり、

西征の役此は半年賊鋒銳を、ぞとせ、而して連戦連捷
 遂に全く其巢窟を覆き、是固に御等諸將校が勵精事よ
 從ふと、全く各團兵士が黽勉命を、從ふと、力も因らざるを、
 予殊に之を感ず、然而して賊魁忽脱し、餘燼猶燃め、誠意
 外の變なり、今や渠遂に其舊據に入り、頗る無狀と極む事
 甚輕視を、かゝる御等其一段奮進諸軍を鼓舞し、速に元
 惡を殲し、予と、日と刻と、御等と共に凱旋し、事

と我 天皇陛下は奏上と得せしめよ、茲は將よこれと告ぐ

明治十年九月二日

征討総督二品親王有栖川熾仁

鹿兒島縣令官物と漁船を移 賊の銳鋒を避る事

叔も鹿兒島縣廳より日向地方と逃走せる殘賊凡そ三百人許高崎警視の派出所と襲ひ高原等と經る、鹿兒島に向ふの電報あり、追々探偵者を出、賊の動止を窺せしめ、八月三十一日午後に至り、賊徒栗野の分署と襲ひ終る横川吉田等へ押來るの報と得たり、又海軍少將伊東祐麻呂より、賊襲來の確報あり、依り直に警視出張所詰の諸員へ通達

一同出廳の上會議する、何れも當地へ乱入必然と考へ、伊東海軍少將へ警備の儀尋問し相成たり、然るも伊東少將も、兵隊人少の事ゆゑ人民保護の儀請合れりとの事、付人民へ立退方の布達と出さる時、縣下の人民は去る頃賊の放火は雁の物皆烏有の屬、漸く假屋と營を歸住せざるも有る、立退の布達を聞かば否と云ふ又賊の攻來るよと周章狼狽取物も取敢ず老と助る走るもあり、親も失く泣號する子もあり、或は壯者は強迫せし蹂躪せし者もあり、實は島中の沸々如く、東西はさやと、景状は目も當らぬ風情なり、縣廳より公用の物件と取片付同所并小辨天臺場は在る所

の彈藥銃器の云よ及を官金よ至るを悉く取纏め、漁船廠
兒島丸へ積込官員へ高千穂丸を乗組、縣令岩村通俊へ総
督本營へ兵隊差向の儀と三度迄上申せられ、遂に高千穂丸へ
乗込れり、伊東海軍少將へ縣地屯在の新選旅團四小隊
餘と併せ率ゝ元私學校の前なる米倉と本營と、賊徒
と逆撃とも軍議一決し、綿貫少警視の廣口并は、大門口分
署詰の巡查三百二十名の指揮官となり、各銃器と携へ、
重田二等少警部も巡查二百名、満田警部補も同百二十名
と附し防戦の用意となり、尚出張所と引拂ひ屬官等と
率て本營米藏へ屯集、今や賊兵押寄せ來るを、んと待

居たり、午前一時、陸軍少將三好重臣、同大佐野津道貫
第二旅團大久保大尉等、近衛兵三中隊と引率し、縣廳
に繰込、暫く軍議せり、小勢なる故詮方なり、一、方面
防禦せん、午前六時比、屬隊と率て重富郷へ向く、出兵
し、本營の巡查隊新選旅團海兵等と以て腕と扼して待
懸たり、

靜寛院宮薨去并御葬送の事

二品親子内親王と申し奉る、仁孝天皇第九の皇女よ
て、今上天皇の皇叔母なり、御母と藤原經子と申奉る、仁
孝天皇の典侍法号と觀行院殿と云橋本權大納言實

久卿の女なり、弘化三年閏五月十日の御誕生より、和宮と稱し奉る。万延元年、徳川大將軍家茂公へ御縁約し相成。同二年四月十九日、内親王宣下有せられ、文久二年正月十一日、家茂公と御婚禮慶應二年十二月九日より、靜寛院と号し奉りたり。兼て御脚氣の御症は惱ませ給ひ、八月七日、東京と御發輿とせ、箱根へ御湯治よ入せられしが、瀉痢の御症加えりて次第重らせ給ひ、聖上の特よ宸襟で惱せられ、大少書記官と始め侍醫方と差遣され種々御療養ありしと、生者必滅の慣習萬乗の尊し生死の継と通れ給て、終り九月二日、箱根より薨去せられたり、御訃至りたるを、

上下の哀、帝なりは斯く止べきも有ざれば、宮内少輔と奉迎使とと差遣され、同六日は靈柩御着京となりたり、主上の御名代は二品伏見宮、兩皇后の宮の御名代新樹典侍堀川女孀命婦二人、其外書記官華族方御出迎麻布御邸へ被為入たり、薨去の日より三日間、主上の廢朔有せられ、東京府下へ三日の間、他の府縣下へ訃至るの日より三日の間、音曲歌舞停止の布達と出されぬ、斯く御遺骸は御遺言より芝増上寺の徳川將軍昭徳公の廟傍へ御埋葬と定らる、則本月十三日佛葬祭と行ひ、其御式の有増は午前七時、靈殿と裝飾なり、八時より諸員着床僧等

著席奏樂あり、洒水伽陀、とて奠供、次、獻香咒文奉請誦
經あり、伽陀、とて撤供、其次、奠茶稱名後、唱回願畢、導師
轉空、僧退坐、夫より喪主并、御名代、兩皇后内親王の
御名代皇族及徳川慶喜以下の名代御外戚御供上臈以下
宮内省勅奏任官奉送、と三職勅奏任爵香の間詰の摠代華
族摠代奏任女官等、総て拜禮焼香あり、次、宮内判任官判
任女官徳川家の一族及宮徳川家の令扶以下拜禮、尊牌
御遷坐濟、後御棺と御輦、納ひれば各退座、と、叔御出棺
の行糶ハ、警部樂隊數提灯洒水提香爐花籠柄香爐幡紗
籠香衣擅林造花御尊牌、伶人雜掌御尊棺宮家扶天蓋徳

川家扶護送朱傘御沓宮の家從喪主宮の御外戚宮内郷
補同書記官并、宮御附女中、宮内屬徳川家の令等、とて
奉送親王大臣參議院省使長次官東京府知事爵香間
詰總代華族摠代儀仗兵等なり、御葬送の御式ハ、先着の
諸員二天門外、奉迎、と擅林衆僧ハ門内、奉迎、へ夫より先
進、龕前堂の左右、排列、と導師之と迎、御棺と龕前堂
に奉安、と洒水以下の僧衆ハ南北、と整列、と次、奠供奉樂あ
り、洒水の次、導師着座伽陀附樂導師獻香咒願廣懺
悔畧懺悔誦經龕前疏四誓偈、回向、四智讚、合鉢打鏡、導師
獻香禮拜畢、と曲録、と倚、次、鎖龕起龕、奠湯、奠茶、念誦、

導師焼香引導役者隨從誦甘露咒稱讚偈願生偈回向文
引接稱號奏樂あり畢て導師役僧ハ南方小披列せり次
ニ禮拜焼香の順次ハ御出棺の時ニ粗同一次ニ徹供奉樂ハ
り畢て御棺と御廟所へ奉送を内親王の尊號ハ靜寛院宮
好譽和順貞恭大姊と奉謚せり天台臨濟日蓮真言宗洞真
宗其外の諸僧教正講義訓導の人々も拜禮あり諺ニ西方
浄土在といひ極樂世界も斯やらんと知も知ぬも押並り御
行糲と拜見一感涙袖と云ふ事ありぬ

振武隊の賊首貴嵩清討死の事

茲も又三好少將ハ賊徒城山ヲ據り私學校と根據とて

勢威甚だ猛烈なりハ現在鹿兒島に在る所の諸兵の部署
と河村參軍ハ照會し參軍より左の通り達せり時ニ九
月三日午前九時なり

三好少將より今日城下攻撃の部署別紙の通り申越候
間爲御心得申入候也

九月三日

敦賀丸船中

大山少將

河村參軍

伊東少將殿

部署

九月三日、重富屯在兵、午前二時發程、目下前線、在
るもの、此時刻、應、て進行をべし、

第一旅團四中隊、上伊敷より小野村原良村を經、
鹿兒島に至る、

別働隊第二旅團四中隊、上伊敷より草牟田を經、
同断、

第二旅團三中隊、涼松より郡山街道を左へ取り、同断、
同五中隊、吉野街道より萩迫に至り、タンタ堂よ
り同断、

第二旅團ハ重富よりタンタ堂通り同断、

別働隊第一旅團ハ前同處より新街道を經、後廻り
より同断、

第二旅團ハ前同處より海岸通り同断、

右鹿兒島攻撃進路豫定を、雖實際重複をるときも、
各右翼を接して進行連絡を維持し、攻撃を肝要とし、

前條の通り夫々部署し、賊徒攻撃の軍議となり、
る所、參謀部付益満大尉營所より來り、軍議を閉じ、營内
を走廻り、諸隊を指揮す、此日ハ烈敷戦闘もなき、雖晝夜
對戦小争闘屢ありて、止時なき、午後五時に至り、重富郷
に屯在せる軍團へ連絡を通じたり、此日岩村鹿兒島縣令

ハ既ニ長崎港ヨリ至リ兼テ東京ヨリ廻サレたりハ二千餘
 の巡查ハ這回ノ脱賊襲撃ノ件ニ仍テ悉ク兵隊ヲ編制セ
 一故跡代ノ巡查ト至急鹿兒島ヘ御廻一有度旨ト電報
 上申セり之ヲ因テ翌四日一等大警部中川祐順二等
 大警部加藤清明ノ兩名巡查千人附屬員二百名計ヲ引
 率シテ鹿兒島表ヘ出張ヲ命ゼレ翌五日東京九ノ搭ト
 出帆セリ九月四日暴風大雨ト車軸ト流セラ如ク各分
 署ヨリ引揚タル巡查ノ少隊長八等屬吉山武三ノ隊四十
 五名新橋際ノ臺場ト守リ警備ト嚴メタル處ヘ午前
 第二時頃風雨ノ乗ト賊輩凡百名計ヲ手メテ得物ト

捉メ先第一ノ胸壁ト押崩さんと或ハ大木巨石ト抛擲ち又
 ハ斧鉞ト以テ壘ト毀ち其餘ハ抜刀ト以テ無二無三ト迫
 景況ハ百千ノ雷ノ墜カスガ如ク短兵急ニ攻懸たり官兵奮
 々防禦セリ如何一けん壘間より一賊押入や否數賊續テ
 乱入り當ニ幸ハ切拂ハ荒廻り來り該隊ハ必死ニ成
 防戦久レハ遂ニ賊二十二名ト突斃セリ其賊中ニ總軍監
 了本郷萬兵衛小隊長ナル勝目泰平ノ兩人ト乱軍の中ニ
 討取たり殘賊尚も屈セざレハ四方八面ニ切リ廻レハ遂
 小叶ト和思え乱足ニ成テ退リ此時官兵死者二人傷
 者二人ト小銃一挺刀十四本斧二挺帽三頭ト分捕たり



振武隊の長

貴島清乱軍の

中ふ戦死す

圖



又舊書物藏跡の胸壁と受持たる岡本大尉の隊へも賊數十名乱入し、縦横無盡に荒廻れども、官兵透きだ防禦して、遂に賊と逐退け、五名と討取たり。石燈籠筋と受持たる吉村少佐の隊と目懸る、鷲黒に攻来りし賊を一際烈しく戦ひつゝ、中より一人の隊將に賊徒の内より一騎當千と聞えたる、振武隊長貴島清あれ脱そなと云より、多勢の中より追取卷き透間もなき射がら砲丸の中より右へ潜り左へ避け、飛鳥の如く馳廻ると狙撃を名と得し一人の官兵間近くよりて此度狙ひ火蓋と切く一發の彈丸過たれど貴島の頭上と貫し、何ういふ以てなまるべき忽地撲と斃し、又起

上り走り掛り狙撃せし彼の官兵は、お向ひ最後の供せよと一刀に切斃し、側へ居たる官兵と又一人斬んとせしが、其儘斃るゝ息絶し、いかに恐ろしき有様なり。貴島討れ、其餘の賊徒は、蜘蛛の子と散らさる如く皆散々逃去しが、負傷の賊は數多く、又も五名と討取たり。此日の官兵大勝利を、愉快くと唱ふ。午後に至ると、伊東海軍少將仁禮大佐と春日艦へ返り、休息せられしが、大山陸軍少將は、此日營中へ來り、彼戦状と實見し、官兵の勉強と一層稱讚せられ、伊東仁禮等と諸共、一同歸艦せられたり。

官兵谷山と鎮靜し、并縣廳と加治木に移る。

叔も九月五日、賊も昨日の激戦、貴島以下宗徒の者共討取られ、且戦闘は疲勞、彼より攻來る事もなく、終日休戦の姿なりしが、夕刻に至り、賊等忽發砲、れは官兵之に應じ、雖墓々數戦もなかり、此日午後七時に至り、川村參軍田の浦に於て、綿貫少警視と召し、部署換と命せらる。翌六日午前十一時、昨日の命令に依て、米倉の營を新撰旅團陸軍中佐千坂某同少佐立見尚文へ引渡し、綿貫少警視は、巡查隊屬官等と悉く引率し、米倉と引揚げ、谷山指宿等の各郷へ出張し、處々潜伏せる殘賊を捕縛し、人民の鎮撫に着手せられ、先谷山郷に赴くと、大門

口まで至り、竹山の方と遠望を、山上よ人の徘徊を、認る。厚東中佐は面會し、彼竹山に人影あり、官軍なりや、但又殘賊なると尋ね、厚東答曰、予、我も怪く思ふ也、探偵有て然るべし、即巡查を分布し、彼處の谷陰、此所の山間、殘る曲なく探偵せしと、令と下り、差遣せしが、彼山上の人々も、我舉動を伺へ、近より視れば、即共官兵かり、其恙なきと祝し、遂に谷山に到着す。于時午後一時なり、彼郷中の景況を、委敷偵察有るが、人氣甚だ、穩たむ、乃ち八方に巡查を配布し、一時鎮撫に着手せり、斯く人心の穩たむ、頃日賊徒小倉啓助、肥後壯之助など

云々者共川邊郷を來り、頑愚の人民を煽動し、或は威伐
 以て脅迫し、又ハ唱を利と以て、漸く近郷を及ぶる威
 カ子臆する者、既ハ城山を操込む者もありたり、其外ハ二百
 餘名、既ハ賊兵を加擔し、本日和田の濱まで出兵せしが官
 兵の此邊に出張するを聞き、元來烏合の者共なれば、叶
 せりとや思はん云合さねど、悉く四方八面を散乱せり、官軍
 より直ハ一小隊を派出し、川邊郷に至り、阿多其外近郷
 の士民とハ最嚴重に取亂し、尚又一中队を喜入郷を操出
 し、今泉指宿等の各郷へ分遣し、是亦嚴密に取亂し、
 各隊と申合せ、歸順人輩何如程の謀策と以て再燃と

計り共速に壓伏んと其手配を致され、去程ハ山谷の
 士族等ハ賊に脅迫され無據一旦ハ賊不應し、既ハ出陣の
 用意をせし、當地方官軍の進入するを聞き、皆山谷を潛
 伏し、官軍賊徒の動止を伺ひたり、又麻兒島縣令岩
 村通後ハ假ハ廳務と長崎に移され、ハ賊徒等追々平定
 不赴くと以て、此日より廳務を加治木に移されたり

官軍圍繞して賊軍を困むる事

九月七日ハ花々敷軍もな、夕方より大雨降濺ぎ、終夜止
 まず雨は乗じて襲撃する賊もや有んと、嚴小警備を遂
 不けん然るも私學校黨の賊徒等ハ猶も猛威を逞し、

喜入郷の士民と脅迫し強て應援をなす。むれど皆官兵の説諭を歸伏し一人の應ずる者あり。されども賊徒の狂暴を恐れ皆山谷を逃避し官軍満田某が同郷へ繰込みしより始り安堵の思となし我家を社歸りまれ私學校黨へ今泉郷へ繰込て百方謀策と儲け士民を煽動して終る二百餘名の衆と鼓舞し劍鎗棒杯と携へ哨兵と張り屯集せり之より依り八日午前一時に至り大雨を乗れ満田の兵一中隊と以て攻撃せしが元來烏合の衆なれば何ら以て堪へず只一戦を敗り八十餘名と捕縛せり川邊郷に潛伏せる歸逆の士民も既り又兵と出り進軍せし

せし所と大立目某の兵より出會ひ百九十名と捕縛す。刀百二十五口銃劍二本和銃二挺と分捕たり。時九月九日あり斯く各郷を煽動する賊將小倉敬助も同十二日に至り伊佐郷を岡信則の率たる官兵の手で捕縛せり。又肥後壯之助は何方をも身と匿すべき所なく同十一日川邊に於て大立目の隊へ自首し或縛まつらもあり。漸平安に至たり徒黨の者も或自首たりされば賊の募み應へたる徒黨の者も或自首し或縛まつらもあり。漸平安に至たり却て説く賊魁西郷隆盛は城山の中腹に假小屋を造り其中に休息し戦も出ざりしが

桐野利秋逸見十郎太等ハ彼所此所と奔走一兵卒と督責一攻撃防禦の方略ハ晝夜思慮と廻一々士民嘯聚とる雖應ざる者も更みなく適威力ハ脅迫され應援せんと爲を士民ハ皆官軍ハ阻隔られ或ハ縛り附もあり又ハ山谷逃れ匿るもありされば齒嚙となり怒れども又詮方もわろり一とんかろく官軍ハ諸團の兵と悉く皆廉兒寫合一山縣參軍と始とて野津二好曾我山田東伏見高島谷大山三浦等の諸少將各持場と固めつ金庫より琉球館淨光明寺山廉兒寫神社玉江橋ヲアセ山竹村の田中と經る石燈籠通やど四方ハ竹矢來と結び十重二

十重ハ取巻つ日々大砲と發射せ誠ハ蟻の這出さ道もなく隆盛ハ高飛をさま様もなき賊軍とて城山と縣廳私學校のこ杖柱と憑つ彈丸之糧食盡て其容貌ハ肉落骨立ち皆裂け髮鬚逆立有様ハ夜刃や鬼神もかくこそあらめと思ひれなりしれども今度廉兒島へ再乱入せ賊等ハ皆西郷子徒黨して義と金鐵より重し身と一毛より輕く一騎當千と呼れたる廉兒島武士の手だれの者所謂向ふ所敵を稱すべき者共が度々の苦戦ハ慣熟したる上死物狂の働かれハ其猖獗謂ん方なく就中私學校黨の賊輩ハ戦ふ毎ハ必勝して未だ二人の降参する者もなかりし晝夜官軍よ

り打立ふ大砲攻ふ今ハ早賊も殆ど困難の躰と現ハ折々
は只一發の大砲と放る戦ハ應ざるもの

虎列刺病流行の事

爰ハ又造物主日本國の生靈ハ何故か患難と來せし
當春以來西南ハ劔戟の重起し官賊方向と異し
雖是役ハ命と殞せし者其數幾許人あるぞ知らん官軍の
戦死と數ふる凡五千人は下らざるべし賊の死亡も亦之
稱へ然るは又一の慘酷なる暴吐瀉病流行せし其名ハ虎
列刺と呼ぶ一度人身ハ感染する時ハ十の八九ハ死に至れり
此病ハ始め支那國ハ流行せしと聞たりが稍日本へ波及し

横濱港の茶焙場ハ傭子女阿繁といふ者ハ傳染し五十二
歳と一期とて墓をこも草上の露と消たりが忽同所の
女等ハ傳染し矢庭ハ四五人落命せし夫より同港へ蔓延
し東京神奈川長崎ハ今日ハ兵庫ハ又一人と次第くハ流
行を其病症の激烈なる始り穢物と吐瀉すること一兩廻ハ
よぶ時手足結冷肉脱し見聞ハ死せる物ぞくハ又傳染
の速りなる泄痢物ハ云ハ及ぞ衣服ハ器械ハ食物ハ傳染せ
ざるハ無りけし官までも消毒と豫防とハ注意せし内
務省衛生局ハ嚴令ハ各府縣ハ電報ハ區務所警視の分
署ハ虎列刺戡の人員ハ區醫と添す町村ハ患者の有無

と檢察せしめ、居室下水の掃除より魚介蔬菜や菓實の出
 所石炭酸、硫酸鉄、阿片、丁幾や龍腦と消毒豫防の方法
 小晝夜の繁劇止事なく、去れ共病勢猖獗なく、假令各
 港に硫酸鉄の壘と築き石炭酸の流と廻りも奮て全國に
 進入し蒼生と鑿殺せん、猛り狂る流行を官謀略を以て
 柔能く剛と制し弱能く強と制すと云は霎時病鋒を避ん
 ぐ為め各大區に避病院を構へ患者を以て之を避し一人
 此症に罹るときは、則門戸を閉ら虎列刺有と戸に貼し暫
 く他人の面會を絶し若患者死に至れば黄色の旗を虎列
 刺の大字に掲げ之を柩前を翩翩し先と拂り送葬し遺

體に必だ火葬と衣類穢物に地と深く掘り之を埋め或
 之と焼拂ふ、如斯傳染を豫防せらるると愚民に却て怪
 無根の説を唱へ虎列刺病の内養を請ふ者有と雖も委員
 等百方説諭し皆避病院に入りめたり之を依て病院に
 入り時親類一世の訣の如く涕泣するも多かりし實に頑
 民と説諭する政府の艱難察すべし、虎列刺も此方策を辟
 易し西郷と共に亡ぶべく稍退散の氣色と現たり

近世太平記四篇卷之中 終

五十七卷 五言 終 卷之五

Vertical columns of text in a kuzushiji style, containing multiple columns of characters.



